

はあい！ やっほー。

「そんなことは知らん」

なんでえ。あんたもそういう人だったんだ。

「そんなことも知らんのか」

なぜ、私が言われなければならん！

「なんでえ、あんたもそういう人だったんだ」

真似されたあ！

「そういうことで、始まり始まり！」

人の話をきけえい！

はい、君に言いたいことがある。

「なんでしよう？ 烏賊の墨でしようか」

そんな君に言いたいことがある。

「なんでしよう、いつものゴムでしようか」

まあまあ、そんな君に言いたいことがあるんだよ。

「なんでしようか。笑い話でなければいいのだが」

だからね、君に言いたいことがあるっていうのがわからんのかい！

「そんなひどいこと、僕にはできない」

どうして？ わたしはあなたに素晴らしい世界に導きをしなければならないのよ。

「そんなにまで貴女を求めていた私が馬鹿だった」

それほどまでに奥深く求めていた事実が発覚。

「それはそれほどまで辛辣な事実」

見てはいけない事実。

「そして信じてはいけない真実」

且つて、誰もが求めていた愛情を。

「きつと私のものにしたから」

それはなくなつた。

「嗚呼、其れ程までに喪い掛けた必定の如し」

人は笑う。

「いつしか、涙が枯れ果てるまで」

追いかける自分の道を。

「いつまでも追いかけていこう」

世界の暗転に、人は動揺した。

さてと、旅にでも出ますかね。

「ええー。どこに行くのよ」

それにしても晴れた天気ですあ。

「ええ。そうですね。で、どこに行くの？」

基本的に度なんて久しぶりだから、トイレットペーパーを見つける旅なんだ。君も来ない？

「要りませんし、行けない。行きたくないし、要らない。さあ、この矛盾点は？」

どこにでもいるようなタヌキを被った狐！

「誰だ！」

え、知らないの？ そんなことをしたって、意味がないのにね。

「誰なんだよ！ 教えてくれ！ 一つぐらいいいじゃないか。君は一人なんだから、そんなところで我慢したらだめですよ？」

そんなことを言われたって、私にたった一つの宝物しか用意されていないじゃないか！

「それで、十分だ。もちろん絆を深めて」

何の話よ。

「一層友達からの関係が決まっていく中、あの人は魔王に立ち向かっていく。その勇敢な姿は私の彼氏のように」

あなたはだれ？

「きつと私にも光は降り注ぐ。綺麗な光の中にあなたがいた——」

私は誰なの、と。

「一人で立ち向かった日々はいつも怯えている毎日。それが今では綺麗な教会の中で、雨と叫んでいる」

教会の中にいる境界線上。ほら、手を差し伸べて。

「一人はいつも怖い。何をしても意味がないのだから。一人でいる世界にたった一人、私はいた」

魔王様、どうかお願いします。彼女を楽にしてください。

「いつそ、ひとおもいにといい言葉はなくなった」

彼女は救われた。魔王様が創られた世界の中で彼女は救われた。

「いずれにしろ、何もできないことには変わらない」

それでも彼女は大海原に我が身を任せるのがいつの間にか大切なことだと知っていた。

「だから信じた。いつものように月に祈りを捧げることを止めていたこと彼女は知った」

そして魔王様に仕える自分がいたけれど。

「ほんほこたヌキは笑って。そしていつの間にか自分は泣いていた」

あの人には厳しい、魔王様がいつの間にか私を支えていてくれた。

「夜の中に一人闇を見る私。その中に光を差し込んでくれた魔王様」

どうか、私が仕える罪をお許してください。

「それからでも遅くはないから——」

いつか、私が自由になったとき、魔王様。

「どうか、この身を共に月に捧げましょう」

知ってる？

「なにをなにを？」

知ってるんだなあつて顔しない！

「いや、まて。もちつけ」

知っているなら話が早い。私の話を聞いてくれ。

「だからそれを知れっていうんでしょ？」

いやいや、そうじゃないそうじゃない。きっと知ってほしい希望を持ちつつたぐさんの星を眺めればいいんだよ。

「なるほど。犯人はジャックなんですかね？」

そのネタがわかる人がいるのか？

「ジャックについてなら抽斗（アジトのことを指す）を開けることね」
どこの名言やねん。

「……」

あ、そうなんですネ。

「そう、私が産まれたときにここが思い出の場所」

はい？

「いずれ知りゆく事実だったから、私は何も言わなかった」

何のことですかい？

「たくさん、いろんなことがあつてもいいと思つたの。どっちにしろ私の願い事は変わらない」

おいおい、意味わかんないことを言つたらだめだよ？

「私がいるうちに彼女を助けないといけませんのです」

まさか、そいつは……！

「そう、飛木徒のことよ」

誰やねん。

「私は金糸雀に鴉の泣声を利かせたたの。たが二つ続いたのはわざとつていうことに気付いて

よ！」

私はいつもあなたのことを心配していたんです。

「カナリア。いつものように笑つてよ」

涙を流しているのはいつものこと。いつだってあの人のことを考えていたのは私だけじゃない

いはず。

「どうして、どうして。私はいなくなった人のことを想うことすら許されないの？」

「いつだってそんなに考えているからなのよ。私は耐えられる。そして罪は許された――。」

「いつしか、サヨナラの言葉を思い出した日々。そして必ずと約束した世界の中心点で笑ったあの顔を今でも思い出せる」

「そう、あれは夏の日だったのだ――。」

「私がいつものようにスーパーを利用していました」

「きつとそれだけが希望の星だということに気付いたのはある少年が万引きをしようとしていたところ。」

「そこにいつものようにその少年を見つけた。そして笑った」

「その少年はあの人の娘だった。」

「娘だということが私には驚愕的だった。いかにも少年という見た目をしているのに、それでも女の子を主張する少年は」

「至って真面目に答えました。」

「僕は女の子にフラれたんだ」

「娘になって友達になろうとした少年。だけど、その手に握られている一つの商品。」

「万引きなんてしていなかった」

その事実が私を再び驚愕に落とす。

「一人で苦悩した日々をまたしても思い出してしまったあの日のこと。そして少年がここにいるのはこのスーパーで出会ったその女の子との出会い。いつものように涙を流してしまうのだろうか」と言ってしまうのだろうか」

私は何もしていない。その女の子も何もしていない。そしてこれからも女の子は少年と友達になるでしょう。

「友達の先に未来が見えるから。未来の先に幸せが待っているから」

だから万引きをしたのだと。女の子が笑っていられるだけの想像をその少年が常に願ったから。

「私の為にありがとう。さつきはごめんね、友達にならなつてあげられるから」

そして少年の夢は叶った。その時を少年は笑って受けとめた。

「女の子に男の子がいるのかなと」

思い出したよ。ねえねえ。あるとき、私に告白したじゃん？ 今なら本音が吐ける気がするの。聞いてもらいたいな」

「何？」

私の美味しい料理を作つて幸せそうに食べてくれたのはあなただけだったの。だから恥ずかしくて勢いも借りて、フツちゃつてごめんね？ いつの間にかあなたのことを好きになれたの

はいつの間にかだつたな。

「そつか。でも友達のほうが良い気がする。そつちのほうが気楽じゃん？ でもたまにはご飯が食べたくなるから、その時にまた話そうよ」

うん！ わかつてるよ。でも一緒に暮らしているくせにそんなこと言わないで。

「はっはっは。楽しいね、毎日が」

うん——。

「思い出した記憶は私の感情を認めてくれた」

僕の感情は今でも笑ってくれた。笑顔になつてくれてありがとうと言つてくれた。

「彼女は今でも僕との付き合いをしてくれたことに今でも思い出せる」

いつしかあの思い出が彼女との接点にしているのなら、僕は幸せの形を作つたのなら。

「それでも時々のように思い出すことをいつしか楽しみにさせてくれて」

ほんとうにありがとう。

「ほんとにありがとう」

これからの人生にあなたがいてくれたから。

「これからの人生にきみがそばにいるから」

きつと神様の言つたとおりになるんだろう。

「僕たちを見てくれていた神様の言うとおりになるのだろう」

さよならの言葉を忘れさせてくれた。

「ありがとうという言葉を覚えさせてくれた」

そしてなにより。

「出会ったこの瞬間を大切にしてくれた周りの人にも感謝をしないといけない」

そう思つて、今もキーを叩いている。

「記録に残そうとして、それを思い出すだけで、幸せになれるって」

信じているから——。

「ありがとう」

そして。

「また会おう。その日が来るまで」

私は信じているから——。

「僕もその日々を思い出して」

信じているから——。

「待っているから——」

さてと。

「その言葉を何度繰り返す」

知らん。

「なんでえ。言ってくだせえよ」

知らぬが仏。あなたも仏。

「この野郎。私を騙ったね！」

いや、漢字間違い。殴ったでしょ！

「いや、漢字間違い？」

うん、漢字間違い。

「すごい。ここだけ丁度いい」

どうでもいいよね。

「どごがよ！ 私のどごが丁度いいのよ！ そんなひどいことを言うなんて信じられない！」

えっと？ 突然なんじや。

「私はいつだって自分に正直で頑張り屋さんだったのよ？ なのに、それでも私に酷いこと言

うのね！」

わしのことを忘れたからでしょうからねえ。というよりイミフ。

「私のことを忘れるなんて。そんなにひどいことをするのなら、私にも考えはあるわ」

なんじや、言ってみい。

「私と結婚しなさい！」

「どういふこと！ そんなこと、僕には耐えられない！」

「ほらみなさい。なら、先ほどの言葉を訂正して、トイレットペーパーを巻く頃に読みなさい！」

嫌だ、嫌だ、嫌だ！

「はっはっは！ 私の前だとあなたもそんな風に自分を折るのね。簡単な人間だ古都」
で、でも、僕は！

「何を言つても無駄よ。いつものように訂正することを望んだあなたの望みは叶わぬ。私のことを信じてきたから、何をしてても無駄なのよ」

新聞配達やりませんかあ？

「ああ、はいはい。ほら、僕？ 新聞配達の人来たから。一生懸命頑張ったね。おめでどう」

新聞配達……。そうか、僕には！

「なんですか？」

僕の記事が書かれているっていうことは信じられる？ お姉さん。

「どういう意味かしら」

そこにもしあなたの写真が写っていたのならどうなるのかな？

「まさか！」

そう、貴女が撮ってきた写真の一部をもう公開しているという、その事実打ちのめされる

のだ！

「……。もう、終わりだ……。そんな武器を持っていたのね」

お前はそんなところで終わる女性じゃないだろ。お前は俺を倒したんだから。だから一生懸命のあなたに頑張つての言葉を探すわ。

「そうだ。私は、ここで終わる女性じゃない！ 名前を公開されたとしても！」

こ、この力は、まさか！ ぐわあああ！

「私は新聞配達やります！」

あ、はあい。

「とりあえず、何オチ？」

ううん、多分現実逃避オチ？

「良いんだろうね」

まあ、いつものことだからね。

「うん、空がきれいだね」

そんなことをしていた私たちはいつしか夢の一部を飾っていた思い出を思い出しました。

「空の綺麗な姿は僕たちの姿と一心同体」

そんなにも求めていた思い出の欠片たちは集まって。

「一つの輝きに集いました」

いずれ、御陽様に輝きを求める勇者が私たちの前にやってくるでしょう。

「そのときに全てを話しましょう」

今、行われた一切の行為を。

「それが勇者の求めた魔王の封印する行いだ」と

そしてそのとき平和を求めたのなら。

「その勇者はお姫様と結婚し」

魔王は永久に滅ぼされるでしょう。

「そのときを信じ」

私たちは今でも封印された場所で。

「勇者を待っている」

何をしようか迷っているそのあなた！

「誰に言っているのか全く分かりませんが」

とりあえず何かをしているあなたも含めたあなた！

「いや、誰かを特定すればいいってもんじゃないでしょ」

でもでもやっぱり、特定していた過去を持っていたあなた！

「最早、いみがわからん」

きつとねあなたの前世には犬がいたでしょう！

「縄文時期には犬とマンモスに戦った人がいたことは注釈として入れておきます」
もう、ちよつとチョベリバ！

「古いよ」

わかりました。私のターンですね。

「何のことやら」

きつとあなたはね。それだけで良かったということを示したんですよ。

「うん？ あ、チャイム鳴ってる。誰だろ」

だからスコツチングについて語りしき姫を我は渴望するけり。

「あ、いらつしやい。今日はね、休みをもらっていたから」

己の信ずる道を選びたまえ。

「これ？ ああ、私が持っているDVDだよ。誰もが知っている意味わからないものだけど」

わたし、ついていくんだよ。どんな辛いことがあつても前向きに捉えよう！

「ちよつと、あるアニソンに似ている？ そうかもね。神が知っているんだよ」

ネタバレ禁止。

「なんでえ。あんたもそういう口のひとかい？」

そうだねえ。あつしも悪はできめえ。基本的には何もできないあつしですがね。

「きつとそうだと信じていた。だけど、あの日から運命の歯車は変わった」

「私にだけくるくる回る世界の如し、答えこそあれど、私の本性を知っている人はもうどこにもいない。」

「さよならを思い出したかった。ありがとうと言いたかった。きつとそれだけに近いことをやるだけで幸せになれたのに」

世界は変わる。人は巡る。時は駆ける。

「いつしか叫ぶことを止めた狼少年はいつも笑っている。何をしても変わりようのない月夜の世。永久に続く常世の世界」

彼のことを嘆いたばかりに何もできない私がそこにはいた。

「何もしようとはしない彼が私を知っていることにも何もできないことにも私は、わたしは！」
じつとしていられない。だけど何も知らないのは罪じゃない。

「いつしか自分のことを知った姫はこの世界から消えていった」

さよならを思い出したかったというひとことを残して。

「いつの日か思い出すときがあるだろう」

私と居た日々と。

「そして狼少年が笑っていた頃にもう一度吠えて」

遠吠えを聞きながら。

「海べりの近くで一人立ち上っていた」

ところで、このDVDいつ買ったの？

「これはね。なんだか、昔から伝承されているある一家の家紋なんだって」

うそ。じゃあ、この家は伝承されている記録がこれなんだ。

「でもね、持ち主の記憶をいじるらしいから、いつか私のことも記録されるかもしれないの」

へえ。じゃあ私もその一部に入って良い？

「うん。じゃあ、まずは最初からやってみようか」

月の下に行けばいいんだね？

やあ！

「どうしたの？ いつの間にか陽が上がってるね」

そうだねえ。今日はトイレットペーパーを沢山仕入れないといけないね。

「世界はそうやって安定していくのかな」

何かあったの？ 悩みなら絶対に聴いてあげるから。

「ではお聞きしましょう。あなたの悩みは？」

私のことなんて放っておいてよ！ いつもの涙を見せないのはどうして？

「そんなことを悩んだの？ 実に下らないね」

とまあ、そんな感じですよね。

「まあまあお茶を濁すのもこれつきりにしようよ」

じゃあ、ホントのところを聞いてみましょう！

「それでは聞いてください、失われた霜月」

それ……、わかる人いるの？

「いや、わかるかもしれないし、気になるところでございますよ」

なんか英語にしてみてもよみたいな？

「いや、わかる人にはわかればいいし、わからない人はミステリーだと思えば。」

曲でミステリーの表現をどうすれば?!

「わかる人もいますよね。だけど、したら辻さんが笑っているの?」

さつきから著作権侵害言葉を次々言ってますが。

「大丈夫。マリアならもういない」

いつしか、友達だったマリアは聖像に呪いを籠められたことに遺憾の心を示すのは至って普通の事でした。

「何のこと?!」

いざれ知りゆくであろう奇跡と季節の頃。知りゆくことを覚えたサヨナラの言葉。私が知っているのはたったのそれだけ。

「えー、意味がわからないので、やめてください」

アイドル化されたキャラクターは気にせず知ってしまった答えを追いかけるだけの人形になってしまったのです。

「なんのことやねん」

いつも覚えていたことを思い出したくない頃を思い出したくなる師走の季節。そして人を護つたある日のことを思い出すだけでも幸せになれる、そんな大切なこと。

「もういいから」

その言葉から連想されるペンションで知っているだけの事実を重ねるだけなんて私には到底真似できなかつた。

「いつしか、私から話すべきであろうことは私の心の中に畳んで、時期が来たときに教えることにしましょう」

サヨナラなんて覚えていないけれど、それでも世界は変わらない。普遍たる事実はいつも人を襲う。

「この家には何も残されていないけれど、それでも前を向いて歩いていく人生が、その記憶と重なることを思い出していた」

記憶の中にある、貴方の顔。私を覚えているその表情は何もしていないことからの変りばえない毎日。いつしか眩くのをやめた人みたいだった。

「一つの記憶と共に歌を歌う。離された言葉の数々を知ってしまったのはどうして？」

一人歩きする気持ちと感情は私たちと居たかった。

「二人で歩んでいく季節は私たちに秋風を教えてくれた」

そしてもう叶わない、ある一つの夢。

「二人の未来にはもう、輝かしいものを失ってしまったと」

一つの言葉に宿された、その言葉。

「さよなら、サヨナラ。私を覚えていてくれてありがとう」

思い出の中に貴女がいるから、それだけで幸せだよ。

「且つての思い出をひっそりと涙を流しながら、言葉を紡いで、一生懸命に私のことを励ます、

隣にいる人」

思い出したからやって来たんだけど。

「その言葉が嬉しかった。ずっと傍にいてくれて、輝きを失った未来はまた作ればいい」

ひとりで思い出こした思い出は、きつと今では煌めきと共にまた輝き始める。

「壊したものを直せばいいように、思い出も直せばいいんだよ。新しい過去を作るために人は

未来を歩むんだから」

私は笑ってしまった。泣いて泣いて、そして気付けば笑っていた。

「どうして泣いているの？」

貴方はずるい。いつも私を馬鹿にしたように心配する。

「だから、お前は馬鹿なんだよ」

馬鹿って何よ。

「そんなことを思った、ある日のことでした」

そして季節は朧月に代わる頃合いになって。

「また、季節は巡る」

世界の中で一番きれいなあなたの顔を。

「また、思い出した」

さあ、君に言いたいことがある。

「なんでしよう」

今日、地味ですね！

「なんで！ この展開じゃある人しか喜ばないでしょ！」

だってそうやって売っていくんでしょ？

「知らないよ。まず君に言いたいことがあるんなら、普通魂の所属地域を聞くもんじゃないの？」

なんだ、それ。

「知らないの？ だっさー。まったくこれだから、世界の辺々を知らない者は
ダレ？」

「それだからトイレットペーパーを撒く人は
巻く？」

「これだからトイレットを知らない人は」

だつてさあ、あの人しか知らないんだよ？」

「ええ。そうですね。もうトイレの存在意義は失われました」

なによ、今度は。

「これからの僕の人生を手伝ってくれたのはほかでもありません。あの、トイレという偉大な
るものを捕まえたときに起きた偶測を元に算出しました。それが失われてしまったのです」

何を言っているのかさっぱりわかりません。

「きつとね、君に見えている人がこれからの可能性になるんだと信じてこれからになるんです。
だから私は捕まえたときの興奮が私を包み込みます。ああ、この世界に人は望むことを知って
いるんだと」

世界の事を知っているのはあなたしかいない。そういたいんですね。

「ええ。私は幻想世界の中に自分の身を置いてみました。だけど、何も知らないものを知って
いたから、きつと涙をしているのが今でも思い出される。私だって、本当は……！」

いつの日か可能性のことを知ってしまったことが今でも災厄だと知ってしまったのです……それがあの日呼び起こした。

「その日のことを涙しながら語ってくれたのはいつの間にか自分だけのこととして生活しているのだと、私は思いました」

せつかくの世界の中で私は幻想について語ってほしかった。だけど彼女はいつも斧を持って妖精を斬り裂いていた。その様が水を刀で斬ることと何も変わらないのが虚しくて仕方ない。

「その日から私は変わりました。いずれも世界の事を考えているのが終わったとき、人の想いを斬り裂いたのはどうして？ この世と永久なる現世を常世と思う日々はどうしても壊れないのはどうして？」

私の苦悩は変わらない。だけどいつの日か私が知った事実はいずれも世界が変わらないのが当たり前だと烙印を押されたあの日

「神無月に祈った季節の頃、そして思い返すは波の音。世界が変わってしまったことを今でも思い出せる」

海が空に。空が海に。そして山は天に。大地は変わる変わる森の中へと入っていく。

「ああ、私は夢を見ているのか。それともこれがほんとのことなのか」
今でも夢見る世界は。

「そうして創られた」

私が見ていたものは何だったのか今でもわからない。だけど世界が安定を見せてくれたから今でも思い出せる。

「共に過ごした時間。共に流れた時間。悠久ともいえる常闇の世界で見せてくれた光が私を包み込んでいる」

それだけが全て。そして今でも思える、幸せなひととき――。

「私はあなたをこの世に捧げるときに」
また来てね。

「これからの世界をあなたに任せるのだと。そしてこれからを共に過ごしましょう」
いずれなひとときもあなたと共にいるから――。

いつもの感じでお送りする番組、ラツシユでゴー！ も最後の時間になりました。

「うそこけ」

いつもはこんな感じなラジオパーソナリティーも最後の時間になりました。

「なに不謹慎なことを言っている。馬鹿者かあ！」

いつもいつもふざけているディレクターの古文書もいつの日にかまた改めたいと思います。
す。

「あなたはなにをいつているの？」

ひらがなにはわかるめえ！

「貴方は何を言っているの？」

感じにすればいいってもんじゃない！

「じゃあ、どうすればいいのよ！」

さあねえ。いろんなところからネタを引っ張ってきたわけじゃないんだけど。

「いや、持ってきたでしょ」

「いや、持ってきてない。」

「でもあのネタがわかる人いるの？」

さあねえ。今はイントラネットというものがあるので、それについて誤算書ください。

「何を言っているの？」

いや、漢字変換ミスって楽しいなあって。

「ふざけるな！ わたしはそんなことで悩んだりはしないんだ！」

いずれにしろ、私が引き起こした罪はこんなにも深き老修道士に渡されたとは！

「ああ、ふがない。お主に何が出来よう」

何を以てしても魔王の力を借りなければならぬという事実が怖くて仕方ない。だってあの御方が今でも抵抗している！

「レジスタンスもなかなかな力を持っているんだな」

なんと。一行になが四つも！

「きつとそれが魔王の抵抗さ。もう間もなく終わる。この世の全てが果たされる時が来たんだよ」

いつまでも楽しい時間をありがとう。

「いつものように楽しい時間を過ごさせてもらいました。本当にありがとう」

そしてあなたとのサヨナラの時間が来ました。

「思い出した思い出たちは写真に収めました。綺麗な思い出が今では星々のように輝いています」

いつかの日のように出会った時、あなたは最初にカメラで私の顔を撮った。

「怒ってたよね。でも今ではいい思い出。楽しい思い出の一部だよ」

共に過ごした日々は素敵でした。君を愛することのできるようになった自分を幸せな自分だと今でも信じています。

「きつと私には何もできないと思う。だけど、あなたは私を喜んで迎えてくれた。いつも笑っていてよって何度も言ってくれた」

そうして励ました、こんなにも月日は経ちました。何時にも思った思いをあなたに伝えます。「あなたが好きなんです」

私はいつもあなたのことを見ていた。見ていて学校で隣の席になったときは嬉しくて仕方な

かった。ノートをとるふりをしてあなたを見つめていた。

「きつとね。それでも僕は君のことを知らなかったから、いきなり告白されたときはびっくりしたよ」

いつの日か、それが私の答えだった。いつものように頑張っているあなたが、かつこよかったの。今でも思い出せる。

「君を知ってから毎日は時々苦悩だったけど、それ以上に蒼い天気広がる雲の数だけ幸せがあった。それだけ思い出に残った日々が今でも心に残っています」

私はこれから異世界へと行ってきます。何度も楽しい思いをしたこの地を捨てて、これから楽しく過ごしたいと思っています。とても楽しかった。だけど。

「ここに来れば、また始まるよ」

あなたと一緒に居られてよかった。あなたを選んだ私が本当に良かった。これからも一緒だから。

「僕は、君が来るまでずっと待ってるよ」

ありがとう。

「そして。行ってきます」

ずっと、待ってるからね——。

人には言えない秘密があります。

「突然なんですか症候群ですね」

なんですか。

「それはなんですかと母国語で話さない」

なんですか。

「……。虚しいよね……」

それはどうかな？

「な！ 貴様あ！ それだけは手を出させるわけにはいかない！」

そうなの？

「のれよお！」

うるさい、私の秘密を聞いてくれ！

「効かない。だって私の秘密はついに僕が奪ったあなたでした」

とりあえず、言語を確認してくれ。

「わかった炒飯だね。いっつも炒めているもんね。美味しい美味しい炒飯はあなたを呪いの地

獄に突き落とします」

且つて彼女はそんなことを言っていたんですね。わかります。

「とりあえず、炒飯をください」

カレーのルーをセットでお送りいたします。

「きつとカレーは私の手では作れない。それほど、あなたは罪深きことをやっているのです。いずれにしろ、カレーは偉大な作品だと言わないといけないようですね。」

「どこにでもありふれている料理を研究することはとても大切です。そしてこれからも何を手にしたのかはわからない。そしてこれからもわからずに進んでいく未来。」

「私はどこで間違えたのがわからないことが今でも悔しい」
そしてこの時を信じて今答えを示す。

「それが全てだったのだと。あとで知った話、みんなが落胆しているのはどうしてなのと」
私は今でも追い続けている。だけど終わらない世界の始まりを知ったから。そしてこれからも何を示すのかわからないから。

「いつまでも世界を知っていることに頂戴してほしいことを告げてほしい」

「まだらに。世界を知って。そして世界の暗転。教えてほしいことを告げるにはまだ時が早かった。」

「いずれにしろ、私はいつまでも待ち続ける。そしてこれからも教えてほしいことに私は笑った」

それが全てだから。

「それが一つだから」

有名な格言から引用するなら、こう答えましょう。

「全は一、一は全」

そして全てを知ったとき、一つのことを知る。

「それが全は一」

何もかもがわからないときに戻ったところ。

「それが一は全」

きつとこれからも全てを受け流して未来を見ていく。

「世界のことを知ったときに教えてほしいことは何でもよかったのだから」

教えてほしいことはこれからも見ないといけないから。

「何をして許される時の中で、知った真理の言葉と真実は」

私を救ってくれた。そして優しく撫でてくれた。優しいぬくもりの中で一緒に答えを探してくれた。

「私は笑えた。ついに笑えた。そしてこれからはその答えと一緒にずっと生活を送っていこう」

その時が来たんだと、自分に言い聞かせた。そしてこれからもそれは私を助けてくれる。

「そんな幸せな人生を踏んでいけると信じて、ここにその言葉を記す」

其れは先ず、一つ之言葉足りて、失を得て、在を知り、真に根源を知り足り。

「私は何十回も唱えている」

そしてそれはこれからも続く。

「ありがとうと意味しながら」

其れは先ず——。

いつの日だつて私は生きているんだぜ！

「突然どうしたの？」

いやあ、あとがきみたいなものでも最後の締めでもしようかと。

「ううん、だけどこのシリーズにあとがきとかあつたっけ」

そこはそこ、それはそれ、これはこれ。

「のれそれはいわないの？」

言わせるわけにはいかねえぜ！

「どうして？」

だつてあれは柔軟剤が必要なんだと気が付いたから。

「きつとそんなことだろうと思つたよ。リバースカードオープン！」

ま、まさか！

「そうだ、ダークなネクロファイアさんが作つた呪いの窓！」

なんだそれ。

「え、知らないの？ あのととき、あの空、有名時に染まった時の理を」
何の話や。

「全く。いつもそんなことをしているから、知らないんだよ。それだけあなたは馬鹿なの」
いずれにしろ、私には寒くないってことですよね。

「そうだね。いずれにしろと、私は呟く」

どうしたのよ！（CV:寒空畑）

「誰?!」

大丈夫、きちんとその人の許可をもらっている。

「だから、そんな人どこにいたの?!」

そりゃあ、ブースにじゃない。

「この物語をあなたはどこで書いているの?」

解らないあなたに伝えることなんて一つもないわ。

「教えてよ。どうしてあなたは」

私はね、いつもあなたのことを願っていたのよ。そしてそれが終わったとき、終焉の世界を見たかった。

「そして私は貴方の従者となってこれからの生活を送る。
そのつもりだった。」

「だけど、ある一軒に並び建てられた一つの雨」

感謝すべきは万能なる世界の法則。

「そして答えへの道標」

貴方に伝えられたその答えを。

「いつの日に知ったのだろうか」

終わる世界に知っていた理。いつもなら笑って過ごす雨の日。

「私は学校の中で一人待っていた」

貴方の姿を見たかった。

「さよならを初めてあなたが教えてくれた」

そのときからずっとこらえていた恋心。

「一つ降んでまた降りしきる霧雨のなか」

私は貴方を待っている。

「いずれやってくるであろうと、私はずっとあなたを待っていた」

だけど時は非情なもの。私を費やしたものを何も意味のないものにするのが私を壊す。

「そしてあなたはやってきた」

運命はがらりと変わった。宿命は宿したその日から変わらないということ。

「貴方は答えた」

最後に一つだけ言いたいことがあるんだよね？

「ええ。私はあなたにさよならという意味を聞きたいの」

それはね——

「その後、彼女と彼の行方はわからない」

どこに行ったのか、どこに消えたのか。

「のちに伝説となった二人の行方の物語が」

これから始まる——

いつの間にか終わってなかったのが残念であります。

「どうしたあ！」

いやね、私としてもこれからは頑張ってみたいと思うのですよ。

「そうなの？」

ということでのこのお話の？ あとがきでも書いてみましょう。

「あとがきの始まり始まり！」

さて、あとがきなんです。

「はい。なんでしよう」

様々なものがあるなか、こんな作品を手に取りつていただきありがとうございます。

「そうだよ。こんなものにお金を支払った方は損をしているような気がしないでもない」
それを言ったらいけないでしょ。

「それを狙ったのがいけないでしょ」

まあ、それは良しとして。

「良いんだ……」

いかがでしたでしょうか。なかなか、意味不明な展開が続いたと思うのですが。

「なんだったんだらうねえ。綺麗事すらもなかったのに、わけのわからない展開が持ち味なこの物語」

しかも一貫性なんて欠片もなかったのに。でもでも、最後は感動っぽい形になっているから楽しめるような気がしますよ？

「そうなんでしょうか。とりあえず。会話文と地の文を分けることなく続いた物語。一体、どこからこんな物語が始まったのかと」

そうだねえ。きつと作者のストレスの捌け口になっているのはわかるんだけど。

「なぜでしょう。こんなにも遠い昔の目をしてしまうのは」

そんなことはない。

「とりあえず、脈絡がないのでここらであとがきを終わりたいと思います」

もう、なんでもありだね。

「それでは、楽しんで読んでいただけましたのなら作者冥利に尽きると思っています」
「それでは、次の作品も読んでやってください。」

「待ったねえ〜〜！」
またね。